



桜井の作品には0が現われる。この0がまわりに恥毛のような具合に毛が描かれて、あの形を想わせる。「色即是空、空即是色」というわけである」

マラルメの詩のなかには、絶対無を示す「イジチュール」のような系列と、「牧神の午後」のように、牧神がニンフたちを犯す欲望の絶対肯定と両方がある。つまり0と、毛の生えた0である。桜井がマラルメのこの宇宙を戯画化しているなどと私はいう気はない。マラルメやデュシャンを神さま扱いする筋には耳ざわりだろうが、桜井とマラルメ、デュシャンには重なりあうものがある。

これは仏教で云うと、「般若心経」の彼岸思想と絶対無、もう一方で「理趣教」に表現される性の絶対肯定と重なりあうわけで、マラルメも仏教も同じサンスクリットの「リグ・ヴェーダ」や「タントラ」からでてきているわけだ。マラルメは「古代の神々」の序文で、アーリアン族のサンスクリットで書かれた思想のギリシャ・ヨーロッパ世界での展開だけを見ていて、東洋に流れたものは知っていない。日本の作家たちは、殆んど無意識にマラルメのこの欠落を補って、よりグローバルに思想上の対決の種を提供してくれているわけだ。

例えば桜井の作品のなかには、立派な髭をたてて、乳房があつて、女性性器をむきだした雌雄両体人間がいる。これは、デュシャンのなかでは、マルセル・デュシャンという男と、その分身のローズ・セラヴィという女とが一体になっているわけだ。こういう雌雄両体人間を、ユイスマンは「彼岸」という小説のなかで、「ピグマリオンスム」と名付け